

## 附属間連携研究「中高社会接続期の研究」

玉谷 直子（お茶の水女子大学人間発達教育研究センター）

### 1. 本プロジェクトの目的

お茶の水女子大学附属高等学校では、学年定員の6割弱をお茶の水女子大学附属中学校から、4割強をその他の中学校から受け入れている。しかし附属中学校と附属高等学校は別の組織であるため、カリキュラムには連続性がない。近年、附属中学からの進学者と、その他の中学校からの進学者との間の学力差に対する問題意識が附属高校内で高まり、附属高校内ではプロジェクトを立ち上げて、解決に向けての努力が進められてきた。それらの活動の中で、附属高校内のみの活動だけではなく、附属中学校と附属高校の連携、特に各教科間の連携の必要性が改めて認識されるようになった。

本プロジェクトは、そうした問題意識を出発点とし、高校の地理・歴史科、公民科の教員4名が中学校の社会科教員3名に呼びかけてスタートした。同じ構内にある、お茶の水女子大学の附属学校としての関係をいかし、特に中高6年間をお茶の水女子大学附属学校で過ごす生徒の学力を伸ばすため、それぞれの授業や課題、評価等についての情報交換を行い、今後、どのような取り組みを行っていくことが効果的であるかを検討し、実際の授業に反映させていくことが本プロジェクトの目的である。そうした取り組みの成果は、他の中学校からの附属高等学校進学者に応用することはもちろん、他の中学校、高等学校での授業にも応用することが可能であると考えている。

### 2. 今年度の活動

今年度は、まず、情報交換から始めた。附属中学校、附属高校で行われている指導の目的、内容、方法などについて報告しあった。また、課題や定期考査などを媒介として、各教員が、直接接していない生徒の学力を、直接に把握することを試みた。同時に、個々のメンバーが持つ学力観についても率直な意見交換を行い、それぞれ生徒がどのような力をつけることをめざして指導すべきだと考えているのかを探った。

その結果、生徒の発達段階、中学校と高校のカリキュラム、授業のあり方、教員が生徒に期待することの違いなどを考慮して、中学3年生から高校2年生の夏までのおよそ2年半を接続期とすることとした。このように長い期間を接続期とした理由は2つある。1つは附属高校のカリキュラムの問題である。附属高校では1年次に現代社会と地理、2年次に世界史

と日本史を設置しているため、高校1年生のどこかで接続期を終えてしまうと、歴史学習については内容面の接続が図れないことになってしまう。もう1つは、学校行事の影響などにより、多くの生徒の意識が高校2年生の夏頃に大きく変化するため、そこまでを接続期として生徒の成長を支援することに合理性があると考えられることである。

接続期の設定を進める過程で、学力に関するコンセンサス作りが必要になった。本プロジェクトでは、学力とはいわゆる穴埋め式のテストに解答できるような力のことではないが、やはり社会科の学力の構成要素として一定量の知識は欠かせないとの認識で一致した。特に様々なことばの概念を正確に理解することは、学習を進めていく上でも、社会生活を送る上でも重要であるとの見解が共有された。しかし「一定量の知識」を具体化することは容易ではなく、実現できなかった。接続期のカリキュラムを作成するには、生徒が習得すべき「一定量の知識」を具体化することは重要な作業であるが、これは次年度以降の課題となった。

一方、生徒の「活用力」についても検討を重ねた。社会についての知識を学ぶとともに、広い視野、主権者としての意識を培い、学んだことをもとに実社会について考え、表現し、主体的に行動できるようになることを最終的な目標として指導を行っていくという共通の理解が得られた。つまり、本プロジェクトでは、授業で教えられた知識そのものだけではなく、社会について知ろうとする態度、知ったことについて考える力、表現する力、行動する力、そうした力が「社会科の学力」であると考え、これを伸ばすための方法について検討を行っていくこととなった。

その結果、書く活動を通してこうした「社会科の学力」を伸ばすことができるのではないかとの仮説を立てた。書く活動の特徴の1つは、個々の生徒がそれぞれの力で取りまねばならない活動であるという点にある。そのため、書くことは生徒個人の学習活動になり、書いたものは生徒の学力を示すものとなる。私たちが考える「社会科の学力」、すなわち、知識量やその正確さ、視点、問題意識、解決策を考え出す力などは、穴埋め式の試験ではどうも把握することができない。個々の生徒の社会科の学力を正確に把握する手段について、検討をかさねた結果、生徒が書いたものをじっくりと評価することによって、把握することができるのではないかとの結論に至った。これが、書く活動に注目した理由の1つである。

さらに、書くという学習活動を通して、生徒自身も自らの学力を正確に把握することができるだろう。書く作業を通して、生徒自らが、うまく説明できない、実はよくわかっていなかったと気づき、自ら調べ、そうして習得した知識を活用して文章を書くことを通して、私たちが考える「社会科の学力」を向上させることが期待できる。また、書く段階では気づか

なくとも、書いたものを他の生徒と読み合うことや、教員からの指摘により、自分の理解やことばの使い方が正確ではなかったことを知り、習得の機会を得る生徒もいるだろう。

個々の生徒の発達段階に応じた指導を行うことができるよう、本プロジェクトでは「書くカステージシート」の作成を試みた。これは、書く力を4～7つ程度の段階に分けて、それぞれの生徒がどの段階にいるのかを評価していくことで、生徒の学力に応じた指導を可能にすることをめざすものである。国語科で指導するような内容はできるだけ排除し、「社会科の学力」を把握するためのシートとすることをめざしている。現段階では、「説明する力」や「読んで理解した内容を整理して伝える力」と「理解したことに考察を加えて書く力」の間に大きな差があると考えられる。この差は、習得と活用の差であると言い換えることができるだろう。一方、説明する対象や読んだもの、理解したことの難易度も、「書くカステージシート」に反映させていく必要がある。それは、この「書くカステージシート」が「社会科の学力」を測る基準として機能するために必要な評価軸となる。同様に、生徒の考察の深さも「書くカステージシート」に反映させなくてはならないだろう。

現在、知識の量、難易度を1つ目の軸とし、習得から活用への発達を2つ目の軸、考察の深さを3つ目の軸として、「書くカステージシート」の作成を進めている。前者の知識の量、難易度を測る指標としては、生徒の読む力を判断する基準となるいくつかの図書を選定を進めることとなった。

### 3. 今後の展望

今年度は、手探りの状態で活動を始めたため、「社会科学習に必要な書く力」という研究対象を見つけ出すことにほとんどの時間を割くこととなった。今後は先行研究の整理を行い、本プロジェクトの学力観、社会科教育研究における位置づけをより明確にしていく必要があると考えている。具体的な作業としては、「書くカステージシート」の作成を進めたい。実際に生徒が書いたものを評価する作業等を通して、今年度検討したことが的を射ていたかどうかを確認していく必要があるだろう。また、その他の方法も用いて、附属中学校から附属高等学校へ進学した生徒の学力の変化の検証も進めたい。それらの活動を通して、生徒の「社会科の学力」の弱い部分を発見することができれば、特に接続期においては、その点の指導を充実させ、生徒の「社会科の学力」を十分に伸ばすための授業改善を試みていくことが可能になると考えている。